

英語における分裂文の機能

小山 久美子

The Function of Cleft Sentences in English

Kumiko KOYAMA

Cleft sentences, both *it*-clefts and *wh*-clefts, have long been studied syntactically and semantically. It is important, however, that cleft sentences are analyzed pragmatically. Although this paper investigates the function of clefts and reexamines their information structure, cleft sentences, especially *it*-clefts are investigated from a different point of view. It is argued that the factor of which cleft to use is related to the length of the focus and the *wh/that* clause, and that the combination of the focus and the *wh/that* clause is informative. It is also shown that the focus of clefts sentences serves as a “bridge” in the discourse. Through the discussion the peculiarity of *it*-clefts and *wh*-clefts is recognized.

Key Words: cleft sentences, information structure, focus

1. 序

英語における分裂文の研究は、1970年代から盛んに行われてきた。分裂文とひとくちにいっても大きく2種類に分けられる。本稿では(1a)のような文をit分裂文(*it*-cleft)¹といい、(1b)のような文をwh分裂文²(*wh*-cleft)ということにする。

- (1) a. It was a sherry that Tom offered Sue.
b. What Tom offered Sue was a sherry.

分裂文の派生に関しては、変形生成文法の立場などからさまざまな意見が述べられてきた。it分裂文はwh分裂文から派生したものであると主張するもの(Akmajian (1970)), 基底で派生されるもの(base generated)であると述べているもの(Higgins (1971) や Delahunty

(1984))がある。また、基底で生成される場合と分裂文ではない文 (non-clefted sentence) から生成される場合があるとしているもの (Hankamer (1974) と Pinkham & Hankamer (1975)) もあれば, it 分裂文は wh 分裂文の reduced form であると主張しているもの (Gundel (1977)) もある。本稿では, 分裂文の派生に関してこれ以上詳しく立ち入ることはしないことにする。派生を論じるということは, いわゆるルーツを探るということで, もとの形がどうであったかということ推測するにすぎない。たとえもとの形が特定されたとしても, そのことによってのみ分裂文の特徴を解明していくことはできない。派生の如何にかかわらず, it 分裂文と wh 分裂文は特異的な存在であり, 分裂文がどうして使われるのか, it 分裂文と wh 分裂文はどのような情報構造を有しているのかという語用論的な分析をしていくことによって分裂文の特異性を示していくことができると思われる。

そこで, 本稿では分裂文の機能を解明するとともに分裂文が談話の進め方にどう影響するのかということ, つまり談話内における役割を検証していくことにする。まず, 分裂文の特徴をみていき, 次に分裂文に関する先行研究を特に分裂文の情報構造という観点から再確認し, これとは別の観点から特に it 分裂文が用いられる要因, および分裂文の機能について検討し, なぜこのような形式が用いられるのかということを考えていくことにする。

2. 分裂文の特性

分裂文の情報構造についての先行研究を具体的にみていく前に, 分裂文 (2 b) (2 c) と分裂文ではない文 (2 a) を比較しながら分裂文の特徴として知られている基本的な点についてみていくことにする。先に述べたように, 分裂文には it 分裂文と wh 分裂文の2種類がある³。

- (2) a. John lost his keys.
b. What John lost was his keys.
c. It was his keys that John lost.

分裂文 (2 b) および (2 c) は, (3) の命題を前提にしているが, 分裂文でない文 (2 a) は, (3) を前提としていない。ここでいう前提とは, ある文 S がある文 S' を論理的に含意しており, S の否定文もまた S' を含意しているということである。

- (3) John lost something.

- (4) a. John didn't lose his keys.
b. What John lost wasn't his keys.
c. It wasn't his keys that John lost.

分裂文でない文 (2 a) の否定文 (4 a) は、明らかに (3) を含意していないが、分裂文 (2 b) (2 c) の否定文 (4 b) (4 c) は、(3) を含意している。すなわち、分裂文では「ジョンがなくなったのは鍵ではなかった」ということを述べているのであるから、「鍵はなくさなかったが、ほかの何かをなくした」ということを含意していることになる。これに対して、分裂文でない文は、単に「ジョンは鍵をなくさなかった」ということしか伝えていないのであるから、「何かをなくした」ということは含意されていないのである。このように、分裂文の場合は、否定になってもその前提は変わらないことになる。

さらに、(2 a) - (2 c) は同じ客観的情報を担っているといわれている。一般的に、分裂文において、新情報を担っている部分が焦点 (focus) で、wh/that 節が前提もしくは旧情報 (old information) を表しているといわれている。たとえば、it 分裂文の場合、be 動詞の後に焦点がきて、that/wh 節⁴に旧情報がくる。また、wh 分裂文の場合も、文頭の wh 節が旧情報となり、be 動詞の後に焦点がくる。したがって、焦点が新情報を担うということは焦点に強勢 (stress) があり、他と対照をなす (contrastive) ということになる。新情報を担う焦点ではなく、旧情報の方に強勢が置かれると容認度が著しく落ちてしまうことは Givón (1993) が指摘している。次の例文 (5) は、焦点である in Paris ではなく、文末の Mary に強勢が置かれたため容認されないのである。

- (5) ??It was in Paris that I first talked with MARY.

上記の例文 (2 b) および (2 c) をみると、his keys が焦点で、John lost が旧情報ということになる。したがって、焦点である his keys ではなく旧情報の方に強勢が置かれると容認されなくなるということになる。

さて、it 分裂文と wh 分裂文の統語的な特性について少しみてみることにしよう。まず、焦点の位置に生じることのできる品詞についてみると、it 分裂文と wh 分裂文のどちらとも焦点として名詞をとることができる。

- (6) It is the President that appoints the Cabinet.

- (7) What John bought yesterday was a car.

ただし、すべての名詞が it 分裂文と wh 分裂文に共通に生じるわけではない。Prince (1978) が指摘していることであるが、it 分裂文の場合は生物 (animate) であろうと無生物 (inanimate) であろうと焦点の位置にくるが、wh 分裂文の場合には無生物の名詞しか生じない。

- (8) a. It was golf/John that killed her.
b. What killed her was golf/*John.

さて、他の品詞についてみると、前置詞句や副詞句は主として it 分裂文に、また、動詞句や文は wh 分裂文に主として生じる。

- (9) a. It was to Mary that Bill offered the chastity belt.
b. It was only lately that they began to repair this street.
c. It was regretfully that he left California, and it was even more regretfully that he returned.
- (10) a. *What many protest is against pardoning these.
b. *When I became a young revolutionary was then.
- (11) a. *It is tend to rob Ervin and the grand jury with yet a third investigating group that that does.
b. *It is that the President was involved that you are saying.
- (12) a. What that does is tend to rob Ervin and the grand jury with yet a third investigating group.
b. What you are saying is that the President was involved.

ただし、it 分裂文に生じる副詞として様態の副詞は不適切となる。

- (13) a. ?It was quickly that Bill shaved himself.
b. ?It was slowly that Mary dressed to go out.

また、連結詞としての be 動詞は常に単数形となる。当然のことながら、it 分裂文の場合は

主語が *it* であるから単数形の *be* 動詞がくることになるのだが、*wh* 分裂文の場合は焦点が複数であっても *be* 動詞は単数形である。

(14) a. What I need is a car and a boat.

b. What I saw was a man and a horse.

さらに、*wh* 分裂文の特徴として、焦点の部分と *wh* 節の位置を入れ替えても、文として成り立つということがあげられる。このことは、いわゆる叙述文と *wh* 分裂文を比較してみると明らかである。*wh* 分裂文 (15 a) の焦点の位置にある *a sherry* と *wh* 節の *what Tom offered Sue* とを入れ替えても文法的な文 (15 b) になるが、(16 a) の *be* 動詞の後の要素と *wh* 節を入れ替えても文法的な文にはならない。つまり、(16 a) は分裂文ではなく、むしろ叙述文ということになる。したがって、*wh* 分裂文の焦点の位置にくるものは形容詞ではないものということになる。

(15) a. What Tom offered Sue was a sherry.

b. A sherry was what Tom offered Sue.

(16) a. What Tom offered Sue was too sweet.

b. *Too sweet was what Tom offered Sue.

このようにみえてくると、分裂文というものはあるものについての叙述をする叙述文ではなく、あるものを特定する (*specify*) 文ということが出来る。つまり、*that/wh* 節という変項 (*variable*) について、焦点が値 (*value*) となって特定をしている文ということである。しかし、これは文レベルでの機能ということになる。この分裂文が談話においてどのように機能するのかということについては後に触れることにする。

以上みてきたように、統語的な面を含めさまざまな特徴を有する分裂文について、次のセクションでは先行研究、特に情報構造についてのそれをみていくことにする。

3. 先行研究

3.1 Prince (1978)

通常、*it* 分裂文は上記で述べたように、焦点の位置に新情報を担う要素がくるとされ、*that*

節に前提または旧情報がくるとされている。Prince (1978) は、その it 分裂文を 2 つに分けて考えている。一つは、焦点に強勢が置かれる it 分裂文 (stressed-focus it clefts) で、他の一つは、情報としての価値を持つ前提を有する it 分裂文 (informative-presupposition it-clefts) である。前者においては、that/wh 節が旧情報を表しており、それは聞き手の意識の中にあると話し手が推測できるものであるという。たとえば、次の (15) のような分裂文が stressed-focus it clefts で、(16) のような分裂文が informative-presupposition it clefts であるという。

(17) ‘... So I learned to sew books. They’re really good books. It’s just the covers that are rotten.’

(18) It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights.

(17) の場合、先行文脈から話し手が本を縫うということがわかる。つまり、何かが壊れやすい状態になっている (rotten) ということがわかっていることになる。もっといえば、that 節の情報は聞き手の意識の中にあると話し手が考えているということである。ところで、この談話の主題、つまり何について話しているのかというと、それは何かが壊れやすいということではなく、本についてである。したがって、stressed-focus it clefts を用いることが適切になるというのである。(18) の場合、(17) と異なり that/wh 節には先行文脈にはないことが述べられている。本来、that/wh 節には前提もしくは旧情報がくるとされているのであるから、その情報内容は発話時に聞き手の頭の中にあるはずであるが、この場合はそうではないことになる。つまり、彼女は that 節の情報は、聞き手の頭の中にあると思われるものである必要はないと述べているのである。先行文脈にないということは、聞き手にとっては新情報である。つまり、情報としての価値があるのである。ところが、それは聞き手にとっては新情報ではあるが、話し手にとっては既に事実となっているとみなしているもので、他の人にも広く知られているものであるという。いってみれば、話し手が that/wh 節の内容の信憑性に責任を持ちたくないということなのである。だから、たとえ聞き手が知らなくても、広く知られたこととして提示しているのであるという。神尾 (1990) のことばを借りれば「聞き手にいきなり新しい事実を突きつけ、それを受け入れさせた上で、以下の談話を展開していくという」⁵ ものである。たしかに、本来前提または旧情報がくる that/wh 節に聞き手にとっての新情報がきているのであるから、それを説明するものとしては妥当であると思われる。が、果たしてそれだけであろうか。

この点については次のセクションで詳しく述べることにする。

ところで、Prince は情報について区別している点がある。それは、‘given’ と ‘known’ である。この違いが無標 (unmarked) の it 分裂文と有標 (marked) の it 分裂文の違いに対応していると考えている。すなわち、given information とは、協調的な話し手 (cooperative speaker) が聞き手の意識内に適切にあると推測する情報のことであり、一方、known information とは、文字どおり、ある人たちに事実として知られている情報ということである。そのある人たちの中には聞き手が含まれないことがある。つまり、聞き手は知らない情報、聞き手にとっては新情報ということになる。前者が無標であり、後者が有標ということになる。たしかに、このように given と known を区別することによって、説明できる点もある。しかし、一見まったく新しいと思われることでも、その場の状況から察知できるということもある。つまり、はっきりと述べられていないことでも、談話に関連するものであるということがその場の状況からわかることもあるはずである。Prince にはこのような場合の説明が含まれていない。

3.2 Declerck (1984, 1988, 1994)

Declerck は、Prince の it 分裂文の分類について、これが wh 分裂文にも対応すると述べている。すなわち、wh 分裂文にも stressed-focus の分裂文と informative-presupposition の分裂文の2種類があるという。彼は、前者を contrastive clefts、後者を unstressed-anaphoric-focus clefts と呼んでいる。さらに、彼は分裂文の種類は2種類ではなく3種類であるとし、3つめを discontinuous clefts と呼んでいる⁶。Prince が informative-presupposition clefts といい、Declerck が unstressed-anaphoric-focus clefts といっていたものは、that 節がたとえ聞き手にとっては新情報であっても、あたかも周知の事実であるかのように、つまり、旧情報であるかのように振る舞うとしているものである。ところが、Declerck が3番目に上げている分裂文の特徴は、that/wh 節が新情報を表し、しかも informative-presupposition clefts と違って、旧情報のように振る舞わない、つまり、まったく新情報として機能するものである。しかも、焦点も新情報を表すので、後に続く談話の話題 (primary topic) となるというものである。

(19) a. It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the week-end.

b. Those apples are good, aren't they?—So they are! What keeps me from eating all of them is that mother would be furious if I left none for the others.

(19 a) (19 b) とともに、焦点の位置にきているのは新情報であり、なおかつ that/wh 節に現れ

ているのも全くの新情報であり、既知の情報のように考えられないものであるという。たしかに、Declerck のいうように、焦点および that/wh 節に全くの新情報が現れる分裂文が存在すると思われる。さらに、彼はなぜ特定の分裂文が選ばれるのかということについても触れている。彼によると、文や談話の主題構造 (thematic organization) によってあるものが他のものより選ばれるというのである。

しかし、主題構造と情報構造 (information structure) とはレベルが異なるものである。Halliday (1967, 1970) は、主題構造と情報構造についての区別をしている。すなわち、前者は文のある部分について主題 (theme) であるとか題述 (rheme) であるとかを述べているものである。主題とは節の初めの位置に置かれるものであり、そこから始まるということを示すものである。題述とは主題以外の部分のことで、主題を発展させていくものである。つまり、主題について述べている部分のことである。たとえば、(20) の例文は二重の主題構造があるという。第一のレベルでは、大きく it was a sherry と that Tom offered Sue という二つに分けられ、前者においては、it が主題で was a sherry が題述である。後者においては、that Tom が主題で offered Sue が題述である。第二のレベルでは、it was a sherry が主題であり、that Tom offered Sue が題述である。

(20) It was a sherry that Tom offered Sue.

一方、情報構造とは、新情報と旧情報で決められるものである。つまり、聞き手にとってまったく初めて知ることなのか、すでにわかっていることなのかということを用いるのである。したがって、Declerck の問題点は用語を混用している点にあるとおもわれる⁷。彼は、ある分裂文が他の分裂文を差し置いて使われる要因は、談話の主題構造によるものであると述べているが、彼のいわんとする要因は談話のトピックということに他ならない。つまり、トピックと主題という二つの用語がかえって混乱を招いていると思われる。Halliday がいうように、主題とは文のある部分についてのものをいうのであると考える以上、談話構造について云々する場合に、主題という用語を持ち出すことは矛盾をきたすと思われる。あくまでも、あるものが他より優位になる要因は談話のトピック (discourse topic) であるといった方がよいと思われる。しかし、ある分裂文が他の分裂文を差し置いて用いられる要因は果たしてそれだけであろうか。別の観点から考えてみることはできるのではないであろうか。この点については、次のセクションでみていくことにする。

4. 分裂文における選択要因と機能

このセクションでは、これまでの情報構造をふまえた上で、分裂文、特に it 分裂文が用いられる要因を別の観点から検討し、分裂文が談話において果たす機能についてみていくことにする。

まず、it 分裂文についてみてみると、焦点の位置に必ずしも新情報がくるとはかぎらないことはすでにみてきたとおりである。それは、焦点の位置にくる名詞、前置詞句などが前方照応的 (anaphoric) なものであることからわかることである。例えば、次の例文では焦点に代名詞が使われている。

(21) a. It is this that makes the language of the body so crucial to our future on this planet.

b. It was at this point that our ancestors became truly human and started to show a distinct difference from other successful species.

(21 a) の this および (21 b) の at this point は、すでにそれを指すものが前述されているのである。しかも、that 節には旧情報ではなく新しいことが述べられているのである。Prince は、このような it 分裂文を情報としての価値を持つ前提を有する it 分裂文であるといい、背景的な役割をすると述べていた。たしかに、上記の分裂文はいずれも段落の最初に現れているものであるが、その前および後の談話に関係しているものである。すなわち、背景的な知識としての役割を担っているともいえるが、それだけとはいい切れない部分がある。また、彼女は前提とされる that/wh 節にのみ注目していて、焦点についてはほとんど説明していなかった。

ところで、別の観点から分裂文をみて注目に値すると思われる点は、焦点の位置に生じる要素と that 節に生じる要素の長さである。英語の一般的傾向として、頭でっかちを嫌うということがある。つまり、長い要素はなるべく文末へもっていくという end heavy⁸ という傾向がある。さらに、重要なことはなるべく文末へおくという傾向もある。一般的にみて、重要なことというのは情報として価値のあるもの、新情報ということである。つまり、end focus ということである。it 分裂文において、関係しているのは後者よりむしろ前者、すなわち end heavy という傾向であると思われる。もちろん、厳密にいうと、焦点ではなく it が主語であるから、頭でっかちという表現はふさわしくないかもしれないが、分裂文の場合の it は形式主語とは異なっているわけで、it be と that/wh で挟む要素、すなわち焦点の長さとは that/wh 節の長さに関してみると、焦点には強勢が置かれるのであるから、強勢をおく部分が長い

と間延びしたようになるのではないかと思われる。そこで、次のような仮説をたててみることができる。

- (22) it分裂文の場合、焦点にくる要素は既知項目であれ、未知項目であれ、that/wh節よりも短いものに限る。

焦点の位置に生じるものが、新情報であれ、旧情報であれ、なるべく短い要素が先にくる傾向があるということはこれまでの例文をみてもわかることである。特に、焦点になるものが代名詞である場合は、代名詞の焦点が文末にくるwh分裂文よりit分裂文の方が好まれるといえる。

- (23) a. It is when we forget about the cultural side of our behavior that we are most likely to be surprised or confused by the other person's behavior.
b. Again, it is a movement that survives into adult life as an important gesture: the head nod.

(23 a) のように焦点が節の場合であっても、that節にくる要素の方がもっと長いものである。(23 b) の場合は、焦点には単独の名詞がきているのでthat節の方が当然長くなる。ところで、(24 b) では焦点の位置にある要素がthat/wh節にある要素よりもやや長くなっている。

- (24) a. It's just the covers that are rotten.
b. Usually, however, it is only when we meet with people who have grown up with a different background that we discover these differences.

(24 a) および (24 b) の焦点に生じている要素をみると、just, onlyといった修飾語を伴っている。これらの要素は焦点を強めているに他ならない。すなわち、強調の要素として働いているのである。これらの要素を伴う場合は、焦点の方がthat/wh節よりも長くなる場合があるといえる。したがって、(22) は (25) のように修正される。

- (25) it分裂文において、焦点にくる要素は、強調の要素を伴わない場合は、既知項目であれ、未知項目であれ、that/wh節よりも短いものに限る。

一方、wh 分裂文の場合も同様に、焦点と that/wh 節の長さが同等、もしくは後者の方が長くなる。

- (26) a. What the instruction really means is 'behave towards strangers as though they are friends'.
b. Instead, what we witness is a reciprocal pseudo-hunt.
c. What Tom offered Sue was a sherry.

ところが、これはいわゆる頭でっかちの形になっているのである。注意すべきは、このような wh 分裂文の場合、焦点となるものは既知項目ではないということである。そのことは、(26 b) (26 c) のように不定冠詞が用いられている点からもわかることである。したがって、焦点の位置に生じているものは全くの新情報ということになる。つまり、wh 分裂文の場合は end focus に則っているといえるわけである。本稿では、これ以上 wh 分裂文について述べることはしないでおくが、これは分裂文ではない文の場合と同様である。とはいえ、wh 分裂文は、頭でっかちを嫌うという英語の傾向からは逸脱しているのであるから、やはり特異的な構造とすることができる。他方、it 分裂文では end focus という傾向に反して、focus が前置されている。この点を見ても、it 分裂文も、焦点が先行し、これに強調が置かれる特異的な文であるということがいえる。ただし、たとえ、焦点の位置に既知項目がきても、つまり代名詞のように前方照応的な項目がきて旧情報を表しているとしても、あくまでも話し手の強調したい点は焦点なのである。さらにいうなら、話し手は焦点と that/wh 節を結びつけた点を伝えたいのである。すなわち、焦点と that/wh 節の組み合わせが全体として新情報になっているといえる。次の例文 (27) では、焦点となっているのは spoken language であり、この spoken language という項目と that divides the world and body language that unites it というものが結びついて初めて情報としての価値が高くなるのである。

- (27) Linguistics, the study of the spoken and written word, has on the other hand, been feted as a major topic. Yet it is spoken language that divides the world and body language that unites it. Our spoken languages, so vital at serving communication within each culture, have developed such huge differences over time that they have become a major source of cultural separation.

上記の例で強調されている点は、spoken language「話しことば」である⁹。つまり、「書きことばではなくほかならぬ話しことば」が世の中の人々と切っても切れない関係にあるボディランゲージと彼らを切りはなしてしまったということをいいたいののである。すなわち、that/wh節という変項に対してspoken languageという値を特定しているのである。しかも、焦点の位置にある「話しことば」が次の文の主語として現れていることから、談話のトピックが持続されていることがわかる。このようにして談話が進められていくと考えられる。いってみれば、分裂文を使ってトピックの橋渡しをしているといえる。次の例をみてみよう。

- (28) Human warfare is our most destructive form of symbolic hunting. If there is any true aggression involved it is restricted purely to the rival leaders, who are genuinely concerned with changing their status relations. But for the ordinary fighting men at the front, aggression is rarely involved. Instead, what we witness is a reciprocal pseudo-hunt. Groups of men enter the fray with complete strangers in their sights. They have no personal knowledge whatever of the enemy troops, who, if they are visible at all, appear as no more than tiny, impersonal specks in the distance. They are killed, not through anger or personal rivalry, but through the need of each fighting man to support this 'buddies'.

(28) ではwh分裂文が用いられているが、焦点である a reciprocal pseudo-hunt は次にくる文脈において説明されている。つまり焦点が前の文脈と次の文脈への橋渡しをしているのである。したがって、次のようなことがいえる。

- (29) 分裂文は、焦点にきた要素によって談話の橋渡しをしている。

このようにみてくると、it分裂文は焦点にくる要素の長さでトピック性によってその位置を占めているといえる。また、it分裂文もwh分裂文も、談話のトピックの橋渡しをしているといえる。

5. 結 論

これまで分裂文の統語的な面や情報構造などを検討し、分裂文の特性をみてきた。特に、it 分裂文においては、焦点にくる要素が既知項目であれ未知項目であれ、強調の要素を伴わない場合は、that/wh 節よりも短いものであるということ、また it 分裂文、wh 分裂文ともに、その焦点が談話内のトピックの橋渡しをしていることをみてきた。ある分裂文を用いる際に他の分裂文よりも優先する要因が、焦点の長さにあるのか談話のトピックにあるのかということ、すなわち、どちらの要因が優位なのかということは今後の課題である。さらに、談話といっても書きことばと話しことばでは、it 分裂文および wh 分裂文の用いられ方が違ってくると思われる。どちらの場合にどちらの分裂文を用いることが多いのかという点も今後の課題となってくる。

注

- 1 学校文法では、it 分裂文のことを強調構文という。
- 2 it 分裂文を分裂文 (clefts) といい、wh 分裂文を疑似分裂文 (pseudo-clefts) ともいう。
- 3 (i) のような文を倒置 wh 分裂文 (inverted wh-cleft sentence) という。
(i) Food for the dog is what I don't eat.
また、(ii) および (iii) のような文も分裂文の1種とすることもあるが本稿では取り上げないことにする。
(ii) The one who did it was John.
(iii) John was the one who did it.
- 4 it 分裂文において焦点を受ける関係詞は、通常 that であるが、焦点が人の場合は who でうけることもある。
- 5 神尾昭雄. 1990, 『情報のなわ張り理論』, 大修館, p. 88.
- 6 Declerck, Renaat. 1984, "The pragmatics of it-clefts and wh-clefts", *Lingua* 64, pp. 263–268.
- 7 Declerck は、Halliday の主題構造と情報構造の区別が談話のトピック (discourse topic) と文のトピック (sentence topic) の区別にも当てはまるという。
- 8 end heavy というと、情報量がある、つまり情報としての価値があるということで、end focus ということも含まれると思われるが、本稿では単に長さの点からこの用語を用いることにする。
- 9 Declerck (1994) では、exclusiveness が it 分裂文と wh 分裂文の意味特性であるといっている。

参考文献

- Akmajian, Adrian. 1970, "On deriving cleft sentences from pseudo-cleft sentences", *Linguistic Inquiry*, pp. 149–68.

- Collins, Peter C. 1991, *Cleft and Pseudo-Cleft Construction in English*, Routledge.
- Declerck, Renaat. 1984, "The pragmatics of it-clefts and wh-clefts", *Lingua* 64, pp. 251–289.
- . 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*, Leuven University Press.
- . 1992, "The inferential it is that-construction and its congeners", *Lingua* 87, pp.203–230.
- . 1994, "The taxonomy and interpretation of clefts and pseudoclefts", *Lingua* 93, pp. 183–220.
- Delahunty, Gerald P. 1984, "The analysis of English cleft sentences", *Linguistic Analysis* 13, pp. 63–113.
- Givón, Talmy. 1993, *English Grammar: A Function-Based Introduction*, vol. II, John Benjamins, p. 191.
- Gundel, Jeanette K. 1977, "Where do cleft sentences come from?", *Language* 53, pp. 343–59.
- Halliday, M. A. K. 1967, "Notes on transitivity and theme in English", Part 2, *Journal of Linguistics* 3, pp. 199–244.
- . 1970, "Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English", *Foundations of Language* 6, pp. 322–361.
- Hankamer, Jorge. 1974, "On the non-cyclic nature of WH-clefting", *Proceedings of the 10th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 221–33.
- Higgins, F. R. 1971, "The pseudo-cleft construction in English", MIT dissertation. Jucker, Andreas H. 1996, "Book reviews: Cleft and Pseudo-Cleft Construction in English by P.C. Collins", *Journal of Pragmatics* 26, pp.699–702.
- 神尾昭雄. 1990, 『情報のなわ張り理論』, 大修館.
- Pinkham, Jessie and Jorge Hankamer. 1975, "Deep and shallow clefts", *Proceedings of the 11th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 429–50.
- Prince, Ellen F. 1978, "A comparison of wh-clefts and it-clefts in discourse", *Language* 54, pp. 883–906.
- Weinert, Regina & Jim Miller. 1996, "Cleft construction in spoken language", *Journal of Pragmatics* 25, pp. 173–206.